

3)

呼吸器心身症 — 気管支喘息を中心として

国立精神・神経センター 精神保健研究所 心身医学研究部

吾郷晋浩

心身症とは臨床各科の診療対象のうち、その発症と経過に心理・社会的因子が強く関与しており、それに対する適切な心理的治療の併用がきわめて有効と予想される病態を示している身体疾患とされている。

そのような心身症としての病態を示すことのある呼吸器疾患として、過換気症候群、神経性咳嗽、cough variant asthma、気管支喘息などがあげられ、さらに広げて気管支炎、肺結核などの感染症があげられることもある。

今回は、これらの疾患のうち、代表的な心身症とされている気管支喘息を中心にあり、その漢方療法について心身医学的な観点からの検討も加えながら述べてみたい。

現在、気管支喘息に漢方方剤が用いられる理由としては、西洋薬による治療だけでは十分な効果が得られない場合、副腎皮質ホルモン薬の副作用のためにその離脱をはかろうとしてもそれが困難な場合などがあげられることが多い。しかし、本来は漢方方剤も西洋薬と同じように、その適応症例（その「証」を示しているもの）にはじめから用いられるべきのものであろう。

気管支喘息の症例で難治化しやすいものを心身医学的にみると、現実のストレスが強すぎるか過剰な適応努力を払い続けて生体の防御機能の低下をきたしているもの、不安反応または抑うつ反応を伴っているものなどである。これらの症例に漢方方剤を用いた成績について、具体例をあげながら述べてみたい。

なお、アレルギー学会の評議員のうち、成人の呼吸器疾患を専門としておられる約80名の方々に漢方方剤の使用経験に関するアンケート調査を行ったので、その結果についても報告する。回答を頂いた66名のうち、使用経験ありは55名(83.3%)、使用理由としては、患者や家族の希望の47名(85.5%)、漢方方剤が効きそうな症例の45名(81.8%)などが多く、また使用対象疾患としては、気管支喘息の51名(92.7%)、慢性気管支炎の36名(65.5%)などが多かった。使用漢方方剤としては、柴朴湯の42名(76.4%)、小青竜湯の41名(74.5%)などが多かった。その使用方法としては、西洋薬を中心にして漢方方剤を追加して用いることが多いとするものが49名(89.1%)、漢方方剤を単独で用いることもある

とするものが31名(56.4%)であった。

これらの結果も考慮に入れながら、呼吸器心身症の漢方療法について述べてみたい。